

日本財団助成事業 活動報告書

事業完了日：2025年3月31日

事業名：

大阪府交野市における「子ども第三の居場所」コミュニティモデルの運営（3年目）

団体名：一般社団法人 根っこわーくす

代表者名：代表者 大島 一

■事業目的

生き抜く力を育む「子ども第三の居場所」を開設・運営する。行政、NPO、市民、企業の方々と協力し、誰一人取り残さない地域子育てコミュニティをつくることで、「みんなが、みんなの子どもを育てる社会」を目指す。

■事業内容

(1)期間: 2024年4月1日～2025年3月31日(週3日/月水金:10時～19時開所)

(2)場所: 大阪府交野市

(3)対象: 平均20名目標（家庭や自身に課題を抱えた小学校低学年）

(4)内容: 「子ども第三の居場所」をつくり、子どもとの1対1の関係を重視しながら、子どもたちの生活習慣形成や学ぶ意欲向上を支援することで社会的相続を補完する。自分の放課後を自分の時間として主体的に過ごせるように支援する。

● 成功したこととその要因

月水金の週3日で、朝10時から夜19時まで開所した。それにより日中は「学校に行っていない子どもたち」が安心して過ごせる居場所になっている。また、放課後には、学校に通う子どもたちが来所し、ともに関わりあうことで、お互いにとって、多様な人間関係を経験する機会になっている。

● 失敗したこととその要因

対象人数20名の来所目標は、達成できなかった。春～夏にかけて、来所人数はやや増えたものの秋以降減少傾向になった。見直しを行い、「自分で決めて自由に過ごす」基本方針が、一部の子どもたちには「どう過ごしていいかわからず」居心地の悪さにつながっているのでは？と仮説をたて、一部、提供プログラムが選択できるよう調整した。結果、1月以降徐々に参加者は増えている。

■事業内容詳細

2024年4月～2025年3月（週3日、10時から19時）で開所した。子どもたちはあそびや生活を共にし、主体性を重視した「自由あそび」「自己決定」の中で、宿題をする。料理をする。野外遊びをする。などで過ごしている。

加えて、助成対象ではないが、週1回火曜10～15時に、「乳幼児親子の居場所」を子

育て支援事業として開設し、母が子育ての悩みをひとりで抱え込まないよう、母同士の交流や共同保育の支援している。長い目で見て、施設をとりまくコミュニティの醸成、小学校前から居場所に親しんでいただくことにつながればと願っている。

●2024年度 事業目標（1～3）の達成状況

【目標1】2025年3月31日までに一日平均利用児童数を20名にする

達成状況：平均11名

※失敗したこととその要因の項目参照

【目標2】ボランティア等の地域住民や、行政、学校との関係構築、多世代交流機会の提供

達成状況：「子どもがつくる子ども食堂」のサポートを中心に保護者などボランティア協力を得ている。今年から新たに、月金の食事提供ボランティアの新たな協力を得た。大学との連携でボランティア交流も始まった。行政とは子育て支援者交流会の講師依頼を2回受けた。また、日本財団助成終了後の2026年度以降、「児童育成支援拠点事業」移行に向けた折衝に取り組んでいる。

学校とはフリースクール事業の出席認定を通して連携を図っている。

多世代交流では、新年にもちつきを開催し、204名67家族が集まった。また、毎月第一金曜に「tomosBar」として、大人が集まって食事を共にし対話する会をスタートした。大人の居場所としてコミュニティづくりにつながればと考えている。

【目標3】子どもの「経験の不足」を解消するような定期的なイベントを1ヵ月に4回を目標に実施する

毎週水曜日の「子どもがつくる子ども食堂」に年間通して取り組んだ。その他、週末には野外型自由遊びの体験や、居場所でのお泊り会、餅つきの開催や、日常の放課後自由遊びの中に不定期で様々な具体的体験プログラムの提供を、あそびやまなびの選択肢として試行をはじめた。

●今後、事業実施によって得たい成果

事業完了後2026年4月頃には、「子どもたちを中心に様々なひとが、足を運びたくなる施設になっている」

ここに来れば、子どもたちは安心して自己表現をし、学び、自由に過ごせる。

ここには「自らの選択」を尊重してくれる大人や仲間がいる。だから、ひとの目を必要以上に恐れず、自分を信じて自分で考え、その選択に責任をもち、失敗を恐れず、不都合なことも学びのチャンスとして、たくましくふるまう子どもたちの姿がある。

それを支えあえるあたたかい文化が定着している。

ここに来れば、それぞれの家庭環境や、学校へ行かない行きにくい、発達の課題をもっているなど、様々な背景をもつ子どもたちが、そこにしばられず、『イキイキのびのびしなやかに』育っていける。

地域の大人、幼い子どもをもつ子育て中の母親、ここで育った高校生たちも「ここへ来れば、ほっとできる」

多様で様々な世代の人が集まって、たのしく過ごし、自分らしさを受け止めてくれる雰囲気の中で、元気になって帰っていく。

地域でその存在意義が認知されている。だから、不登校に悩む親、近所で見かける心配な子ども。行政・関連機関へ寄せられた相談など、「心配な様子の子ども」や「その保護者」が紹介されて訪ねてくる。

この活動が、地域の大人や学生ボランティアの協力とマンスリーサポーターの応援に支えられ、地域に根差した「ほっとできる居場所」「元気になれる場所」「コミュニティの拠点」となり、日本財団の助成終了後も、地域に必要とされる場所として、活動を続けていける。そんな活動基盤と資金基盤を固めての継続・充実を目指す。

●活動を通じて明らかになった新たな課題と対応案

子どもの「自己選択」を大切に、自由あそびを中心に取り組んできた。以前は、大人が余計な口出しや先回りなど、おせっかいを控えれば、子どもたちは、イキイキと自己表現をはじめた。ところが近年、「自由であると、困ってしまう」子どもたちが目立ちはじめた。

具体的には「自由にしたらいいよ」となった場面で、自分で「したいことを決められない」「そもそも自分がなにをしたいか？なにをしていいか？がわからない」「考えればわかる（わかっている）ようなことでも全部聞いてくる」「常に誰かの許可を求める」自分はやらないで「誰かにしてもらおうとする」などの姿がある。

これは「経験不足」からくる、ただ「どうしていいかわからない」だけで、自分で考えて、やってみる経験があまりに少ないケースと、過去の傷つきや経験不足からくる「自信のなさ」から、失敗への恐れが強く、ひとの評価やひと目を極度に気にするケースがある。そのため、本当はしてみたいことがあっても、自らアクションを起こすことが難しい。言葉にする勇気が出ない。そんな風に、自己を委縮させている（自己肯定感が傷ついた）姿も目立つ。

その背景には、大人が良かれと思って、失敗しないよう「先回りする」「代わりにしてしまう」「自分の都合で怒る（従わせる）」「事細かな指示」で本人に考える余地を与える、言うことをきかせる。コントロールしてしまう。などの状況下で、子ども自身の「経験機会が奪われ」経験不足や自信のなさを生み出していることが考えられる。

対策として、引き続き、居場所で過ごす中で子ども自身の「自己選択」と「自由な表現の尊重」を原則とするが、「自由であると、困ってしまう」自分なりの一歩を「踏み出す躊躇が大きい段階」の子どもには、まずは「いっしょにあそぶ」「具体的な活動の提案」をしてあげる。「いくつか選択肢を出して」この中からどうしたいか？選んでもらう。など、「小さな自己選択」をすることからはじめて、徐々に経験や自信を増やしていきたい。